

啄木「愁ひ来て丘にのぼれば」の歌

和 田 繁 二 郎

君をおもふて阿のへに行つ遊ぶ
をかのへ何そかくかなしき

蒲公の黄に薺のしろう咲たる
見る人をなき

以下八聯からなる不定形の自由詩をあげて、
「この自由にして清新な情感の表出は、人間の・官能的な美に対する積極的な愛情と共に理解される可きである。」と述べられ、つづいて、次のように言つておられる。

しかしその郷愁の思ひに満ちた浪漫性は遠く二十年の昔、彼の詩魂をゆり動かした青春の憂愁に繋がるものである。
六十にしてなほ失はぬこの若々しい情感が発句に顯れない筈がない。

愁ひつゝ阿にのぼれば花いばら
花英故郷の道に似たるかな
陽炎や名もしらぬ蟲の白き飛
目に嬉し恋君の扇真白なる
何といふ若々しい情感であらう。

博士はこのように言つたあとで、二十七歳の若さで亡くなつた啄木にこんな歌があると言つて、前掲の「愁ひ来て」の歌をあげ

かつて、川田順氏は「和歌俳句の相関」という文章（昭和十三年三月号短歌研究所載）の中で、啄木と蕪村との関係について、次のように述べていられる。

石川啄木に唯一首『一握の砂』から抹消し去つたがよいと思ふ歌がある。それは

愁ひ来て

丘にのぼれば

名も知らぬ鳥啄めり赤き莢の実

である。悪作ではないけれども、蕪村に夙く、もつと佳いがあるから致し方がない。

愁ひつつ阿にのぼれば花いばら

といふ句だ。これ勿論偶然の一致に相違ない。啄木は他人の真似をするやうなげちな男ではなかつた。とにかく、蕪村の方がすぐれてゐるから、啄木の名譽のために抹消するがよい。

また、これが発表されて間もなく、その年の四月初旬に筆をとられた暉峻康隆博士の文章「蕪村の近代性」（国文学研究第十輯所収）にもこの両者について触れられている。博士は、蕪村が延享二年、東北旅行後にものしした先輩早見晋我の追悼曲

君あしたに去ぬゆふへのこゝろ千々に
何そはるかなる

「蕪村の『愁ひつつ』の句とは恐らく無關係なのであらうが、こゝに同じ青春の憂愁と同様な意匠がある」とされ、「一世紀前の封建時代に、啄木の近代的情感が歌はれてゐる事に注意すればいゝのである。」と結んでおられる。

このように川田、暉峻両氏によつて示された、蕪村・啄木の關係は極めて興味の深いものがある。蕪村のもつ近代性については全く目を見はる思いであるが、一方啄木の歌との相似性も驚く外はない。

ところで小論の目的は、この相似性について明かにしてみたいと思ふのであるが、両氏の言われるように、「これ勿論偶然の一致に相違ない」と言ひ「恐らく無關係なのであらうが」と言つてしまつてよいものだらうか。

結論的に言つて、私は啄木が蕪村を撰取したものとしたいのである。これはいち早い発見とは言えないかもしれないが、過日、啄木の日記を読んでいてこの確証を掴んだのである。

啄木の日記、明治四十一年八月五日の記事に、

床につきて蕪村句集を読む、唯々驚くに

啄木「愁ひ来て丘にのぼれば」の歌

堪へたり。四時の時計をきいて初めて巻を捨て燈を消せり。

というのがあつた。これによつて、啄木が蕪村句集を読み、しかも一方ならぬ感銘をうけたことも明かである。

ところで、「愁ひ来て丘にのぼれば」の歌は「一握の砂」中の「秋風のころよき」の一章に収められている。この一章の歌、五十一首はいずれも明治四十一年八月から九月へかけての作（岩城之徳氏、啄木歌集研究ノート、七頁）であつて、右の蕪村句集を読んだ時期を包含している。

これによつて一応、啄木のこの歌は、蕪村を撰取したものと言い得ると思う。

川田氏が「啄木は他人の真似をするやうなけちな男ではなかつた」と言われるのは、何によつてかわからないが、啄木はむしろ他人の真似をした方である。彼の初期の短歌は言うまでもなく、詩への出発にあつても、蒲原有明がその原形であつたことは有名すぎる事実である。

さらに言えば、この「愁ひ来て丘にのぼれば」の歌は、まだ他からも撰取した形跡がある。それは次の北原白秋の詩である。

見るとなく涙ながれぬ。
かの小鳥
在ればまた来て

茨のなかの紅き実を啄み去るを。

あはれまた、
啄み去るを。

〔心の花〕明治四十一年七月号所収

この詩の二行目と四行目、「かの鳥、茨のなかの紅き実を啄み去る」を撰取したのではないかと思うのである。こういう詩を私が見つけたのは、やはり啄木の日記からヒントを得たことである。

啄木の日記、明治四十一年九月一日の記載に、

泣董の詩人的生活は終つた。有明も亦既に既に歌ふことの出来ない人になつた。与謝野氏はこゑのまだ尽きぬうちに、胸の中が虚になつた。今、唯一の詩人は北原君だ。北原の詩で、官能の交錯を盛んに応用した、例の硝子のにはひの詩は、要するにキネオラマに過ぎぬが、此頃毎号心の花に出してゐる「断章」の短かい叙情詩に至つては、真の詩だ、真の真の詩だ。心にくき許り気持のよい詩だ。今の詩壇の唯一人は北

原だ！

と記している。この後にも九月十日の項に、白秋の詩についての感想が記されているが、おなじく「邪宗門」流のものをとらないで、「心の花」の「断章」を現下詩壇の一品とするということを書いている。啄木はすでに白秋とは親交があった。鉄幹宅や鷗外宅での歌会で顔をあわすだけでなく、この年の七月末、彼が経済的窮迫にまけて、自殺を思うまでになつた日、彼は白秋をはじめその下宿にたずねたりしている。このような事情からみて、かなり精神的に深く結ばれていたことは明かである。

このような白秋への傾倒から、啄木は右の白秋の詩の「かの鳥、茨のなかに紅き実を啄み去る」を撰取したものと思われる。心にくいばかりのうまさから、おのずからその語句を我がものにしたのであらう。

もう一つ言えば、右の白秋の詩の載つている「心の花」のおなじページに、おなじく白秋の次のような詩がある。

あはれ、わが、君おもふ、平オロンの静かなるしらべのなかに、
いつもいつも青やかにまぎれ入り、鳴き

さやぐ驢馬のにはひよ。

あはれ、かの、野辺に寝ねて、名も知らぬ花のおもてに、

あはれ、あはれ、酸ゆき日のなげかひをわれひとり嘆ぎそめてより。

(傍点筆者)

「名も知らぬ」という語句などは、どこにでも使われているものだが、——例えば、前掲の暉峻博士の引用された蕪村の句の中にも「名もしらぬ虫」と出てきているが、——右の詩とおなじページの白秋の詩にあるものとして無視できないように思う。これも形を倣えて「名も知らぬ鳥」となったと見てよいだろう。

こう見てくると、「愁ひ来て、丘にのぼれば」の一首は、明かに蕪村と白秋とから撰取されたものによつて創作されたということになる。そしてその成立時期は、「心の花」七月号を手にした時より間もなくの頃と推定される。前述した、明治四十一年八月から九月にかけてというのと決して矛盾はしない。

啄木が他の詩人の作からヒントを得て、その作の用語を撰取した例はいくらでもあげられる。それがこの当時の短歌にあつたとして

もさほど不思議でもなければ、また著しく「一握の砂」全体の価値を下げるものでもあるまい。作品の精神が啄木のものになりきつておれば、たゞに瓢竊としておとしめる必要もないと思う。

ただ、心なしかこの作には、啄木の個性が稀薄であるように思える。あまりに道具が揃いすぎているし、愁調もやや常識的であるとさえ感じられる。これは、当時の歌会で、さかんに題詠を試みていたことと思ひあわしてその文学の真实性を考える上はかなり重要な資料を提供するものと思う。

(五五・一・五稿)